

年而未病痲者過半、因恐爲之怠役、相共謀、貯糧食不出山中、遂免之者五十有三人矣、是皆避痲之明證、於是乎、益知非天行時令之邪也、門生問曰、倘如師之說、則痘痲可避而免、雖然使病者在山野、如避痘之國、似有人情之不可忍者乎、對曰、否、若誠欲避之、何必置之於山野耶、令曩病之者、侍今病者、戒約不近未病者而已、倘能每痘之所在、如是、則斷傳染之根源、竭海內之毒氣、何難之有、如痲毒、則海內不常有、故不須別禦之、禦痘之從外國傳來、則痲亦隨自斷矣、若能如是、則不死於非命者、宇內其幾許乎、

酒湯

〔叢桂亭醫事小言〕六、痘瘡 結痲

酒湯ハ本邦何レノ時ヨリ行ル、ヤ、未考、唐土ノナキ所ナリ、役ノ行者ノ淨瑠璃ニ、酒湯ノ創ノ事アリ、又虛談ナリ、十二朝ヲ一番湯ト云、十五朝ヲ二番湯ト云、此時ニ輕痘ハカケルコトノナル人モ有リ、必ズ日數ヲ以テ論ズベカラズ、全ク痘ノ輕重ニアリ、

〔痘瘡心得草〕笹湯の心得の事

四五日前より米のかし水を取置て、能ねさせ置、そのうわすみを湯に焚べし、湯に入る、事重き痘は日數にかゝるべからず、湯の内へ手拭をひたし、得と搾りて、かせたる痘の跡をまか、と押へ、湯の氣をあつれば、かせの熱こゝろ能おさまるなり、必ずぬらしあらふべからず、かほは目の上下をよけ、眼の中へ湯の氣入ば、眼中をそこのふ事有、手足認身まんべんに湯を引べし、背は軽くすべし、湯をかけ終れば、風に當つべからず、夫より又兩三日隔て二番湯を浴せしむべし、三番湯をすまして、常の湯に入るべし、

〔痘疹致要〕秘傳酒湯方

夫痘邪ハ、天地流行ノ疫毒也、タトヒ平日壯實ノ兒ト云トモ、其感ズル所ノ邪毒更ニ深ケレバ、沸騰スル所ノ胎毒又劇シ、況ヤ初蒸ニ一度規矩ヲ誤レバ、千恨萬懷四馬モ逐フ事能ズ、死生存亡十日ノ中ニ判ル、誠ニ悲傷ス可ノ甚也、醫トシテ此ヲ不思ハ人情ニアラズ、前説初蒸見點ニ先ジテ